

令和6年度

# 【優秀作品集】

「大切な命を守る」  
全国中学・高校生作文コンクール

警察庁 犯罪被害者等施策推進課

## 発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）は、犯罪等によってその生命、身体、財産、権利・自由を侵害されるなどの直接的な被害を受けるだけでなく、周囲の人々からの心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難など、多様かつ長期間にわたる被害に苦しんでおられます。こうした方々が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深め、社会全体で犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から、全国警察では、教育委員会や民間被害者支援団体等と連携して、これからの社会を担う中学生・高校生を対象とした犯罪被害者等による講演会である「命の大切さを学ぶ教室」の開催に積極的に取り組んでおり、受講した中学・高校生が命の大切さを学び、犯罪被害者等の心情や置かれている状況を正しく理解することで、犯罪被害者等への配慮や共感を広めることに努めています。

警察庁では、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるとともに、教室の受講者だけに限らず、多くの中学・高校生が犯罪被害者等への理解を更に深め共感を生む効果を期待する施策として「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールを開催しており、今回で十四回目となります。

本コンクールの応募作品については、学ぶ教室を受講し、又は報道等により知ったことなどを踏まえ、大切な命を守り、被害者を生まず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現することに関して、自分の考えや意見等を表現した作品となっています。

本年度は、全国から二万二千四百九十点もの作品の応募をいただき、その中から優秀作品を選考することができました。本冊子は、選考された作品のうち、

- ・ 国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点
- ・ 文部科学大臣賞……………二点
- ・ 警察庁長官賞……………六點

を受賞した作品を取りまとめたものです。

本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等のもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

令和六年十一月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当）若田 英

## 審査委員講評

令和六年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールの優秀作品として、国務大臣・国家公安委員会委員長賞、文部科学大臣賞、警察庁長官賞等を受賞された皆さん、ご受賞おめでとうございます。

この作文コンクールは、今回で十四回目となりますが、本年度も全国から多くの作品が寄せられました。作品を応募してくださった皆さんに、心より感謝申し上げますとともに、ご努力に敬意を表します。

いずれの作品も、命の大切さの理解を始め、犯罪被害に遭われた被害者やご家族等の心情、その置かれた状況等の理解、犯罪被害者等支援に関する意見や考え、行動していることなどが表現され、私たち審査委員を始めとする読み手一人ひとりの心に届く内容となっております。

特に受賞された作品では、交通事故・事件で息子さんを亡くされたご家族の講演を聴いて、毎日当たり前のように過ごしていられることが幸せなことだという思いを新たに、大切な命を守り、誰もが安全安心に暮らせる社会を実現するために「命の大切さを学ぶ教室」で得たことや学んだことなどを色々な人に伝えていきたいと決意したというものや、尊い命を奪われたご家族の心情に思いを巡らせるとともに、日頃何気なく口癖のように使っていた言葉について反省し、命の大切さについてあらためて深く考察したことが表現されたものがありました。

また、集団暴行事件で息子さんを亡くされたご家族の講演を聴いて、被害者のご家族が、一生そのつらさを背負っていかねばならないという新聞やニュースでは伝えられない現実を目の当たりにし、「命を大切に。」というご家族の言葉をしっかりと胸に刻んだということが表現されたものや、飲酒運転加害者による交通事故・事件の被害者の方の講演を聴いて、被害者の方が周りの人からの心ない言葉によって二次的被害を受けたことや孤独感、加害者への怒り、ずっと忘れることのない苦しみの連鎖を知り、交通事故・事件について深く考える貴重な機会となったということが表現されたものもありました。

受賞された方々を始め、作品を応募していただいた皆さんが、犯罪被害者等の心情に真摯に向き合い、友人や家族と話し合うなどして自分の感じたことや考えたことを整理し、思いを込めて丁寧に言葉を紡いで作品を仕上げていただいたことが伝わるものばかりで大変感銘を受けました。

こうした経験は、皆さんの中にしっかりと根付き、これからの皆さんの人生の糧になるものと考えます。あらためまして一万点を超える作品を応募してくださったすべての皆様にご心より感謝いたします。この優秀作品集が、犯罪被害者支援に対する国民の皆様のご理解とご協力につながることを祈念しています。

令和六年十一月

公益社団法人全国被害者支援ネットワーク理事長 椎橋 隆幸

# 目次

## ☆中学生の部

### 【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・一人一つの命

東京都北区立浮間中学校

二年

嶋田 穂奏

………

2

### 【文部科学大臣賞】

・命の大切さ

大阪金剛インターナショナル中等学校

三年

松本ひなた

………

4

### 【警察庁長官賞】

・犯罪被害者をなくすため私ができること

朝霞市立朝霞第三中学校

一年

弘山 真菜

………

6

・自分の命を守るために

米原市立河南中学校

三年

北川 愛子

………

8

・伊織さんが教えてくれたこと

高知市立大津中学校

三年

筒井 琴香

………

10

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・命の大切さ

兵庫県立尼崎北高等学校

二年 鈴木紗也乃

……

14

【文部科学大臣賞】

・交通事故のない社会へ

富山県立高岡工芸高等学校

三年 中川さくら

……

16

【警察庁長官賞】

・当たり前を当たり前にしない為に

東京都立園芸高等学校

二年 林 優花

……

18

・伝えること

新潟県立新潟高等学校

二年 米山明日花

……

20

・あたりまえではない『今』

島根県立出雲高等学校

三年 安食 優良

……

23

# 【中学生の部】

## 一人一つの命

(東京都)

東京都北区立浮間中学校 二年

嶋田 しまだ

穂奏 ほのか

私が「命の大切さを学ぶ教室」を受講して一番最初に考えたことは「もし、自分の家族の命が奪われてしまったら」でした。お話をしてくださったのは八年前に小学一年生の息子を交通事故で亡くされた方でした。「息子を亡くした後、後悔で頭がおかしくなりそうだった」と話されていました。その話を聞いて、私もある日、突然家族の命が奪われてしまったらと思うと、怖くて胸が締め付けられるようななんとも言えない気持ちになりました。現在、毎日のように事故や事件などが報道やニュースで取り上げられているのを見ますが、なんでこんな悲しい

ことが起こってしまうのかと思いつつも、心のどこかで他人事に捉えてしまっている自分がありました。でも、今回の話を通して、自分や自分の身近な人にもいつ何が起こってもおかしくないと感じました。だからこそ、今自分が毎日当たり前のように過ごしていられるのも、とても幸せなことだと改めて思えることができました。私のお母さんは、いつも家族の誰かが出かけるときには必ず自分が何をしていたも玄関まで行って「行ってらっしゃい、気をつけてね。」と言っています。私はお母さんになぜいつもそうしているのかと聞くと「もし家族に何かがあったときにあの時ちゃんと見送ってあげれば良かったななどと後悔をしないため」だと言っていました。私はお母さんの言葉を聞いて、自分の家族や身近な人にいつ何が起こってしまうかなんて誰にも分からないのだから、いつも人を大切に感謝を忘れず、後悔がないように過ごさなくてはいけないなと思います。私は講演を聞いて、家に帰った後にすぐに家族に「命の大切さを学ぶ教室」での話を話

しました。そこで私は大切な命を守り、被害者を生  
まず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現する  
ために今、私にできることは今回の「命の大切さを  
学ぶ教室」で得たことや学んだことや他にも実際に  
あった事件や事故の被害者の状況、心情などを色々  
な人に伝えていくことだと思いました。また、命と  
いうものは儂く尊いものなのに、誰かの手によって  
簡単に奪うことが出来てしまいます。誰かの命を奪  
うことで、命を奪われてしまった被害者やその家  
族、たくさんの方の明るい未来を人生を壊してしま  
うということをして一人一人が理解することで変わって  
いくと私は思います。大切なのは、苦しむ人をこれ  
以上生まないことなのです。だから、私はこれから  
の人生で「ありがとう」「おはよう」「いつてらっ  
しゃい」という日常の何気ない言葉、普通の生活で  
も普通の事を当たり前にも思わずいつでも人を大切に  
感謝を忘れず、後悔がないように生きていきたいと  
思います。



## 命の大切さ

(大阪府)

大阪金剛インターナショナル中等高等学校 三年

松本<sup>まつもと</sup>ひなた

「明日はもっと楽しくなると良いです」これは小学四年生の男の子が書いた日記の最後の文です。しかし男の子には明日がきませんでした。二〇一九年五月五日飲酒運転で逆走してきた車と衝突。後部座席で寝ていた心誠君が亡くなりました。三人兄弟の末っ子で家族のムードメーカーだったそうです。お父さんが「子供である心誠はシートベルトをして、しっかりルールを守っていた。それなのに法律を守らない、いいかげんな大人に命を奪われ、激しい怒りの気持ちでいっぱいでした」とおっしゃっていた

そうです。本当にその通りだなと私は感じました。私自身も三人兄弟で小学四年生の弟がいます。もしその弟がこのような事故で亡くなってしまったらと思うと生きていく心地もしいと思うし、現実を受け止めたくないと思います。これからどうしていくのか不安で仕方ないと思います。飲酒運転さえしなければ起こらなかった事故。自分の命よりも大切にあらう子どもの命を奪われてしまった両親の気持ちはどのようなものか考えもつかないです。

わたしはよく簡単に死ぬという言葉を使っています。例えば、「お腹空いて死にそう。」「眠すぎで死ぬ。」などです。考えればお母さんによく「死ぬなんて言わない。」と怒られてましたが、この作文を書くまではただの口癖としか思っていませんでした。しかし今回心誠くんの事故についてたくさん調べて簡単に言っではいけない言葉だと実感しました。

大切な命を守るためにはどのようなことをすればいいのか、交通事故や事件すべてがなくなり、みんな

な傷つかない世界を創るのは不可能だと思います。しかし、飲酒運転はしない。シートベルトを着用する。など、もつとたくさんの人が規則を守ると確実に減らすことができると思います。そのためにはたくさんの人の心を動かす必要があると思います。私も今回の事故を知って、シートベルトを必ずつけようと思ったし、口癖も直そうと思いました。この事件を知らなかったら私はずっと口癖のまま命を大切にできていなかったと思います。「私ひとりではどうにもならない」ではなくて私が気をつけることで周りの人たちも気づき、より良い社会を創ることができると思います。これからはみんなが命の大切さを感じお互いを大事にしあえる世の中になっていくるように私自身も命を大切にしていきたいように気をつけるし他人の命も大切にしていきたいです。

## 犯罪被害者をなくすため

私ができること

(埼玉県)

朝霞市立朝霞第三中学校 一年 弘山<sup>ひろやま</sup> 真菜<sup>まな</sup>

「たいへんだな。」

事件や事故によって、人が傷付けられる、あるいは、亡くなるというニュースを見聞きした時、私はそう思っていた。どこか他人事で、自分には関係ないと思っただけからこそ、「たいへんだな」とただ簡単に思うだけで終わってしまった。

私が犯罪被害者、そしてその家族に興味をもったのは、ある犯罪の加害者家族を扱う報道を見たからである。そこには、家族が加害者として逮捕された瞬間から、裁判が終わり刑が確定した後、誹謗中傷

に悩み、引越しを余儀なくされる姿があった。

では、被害者は？犯人が捕まり、事件や事故の動機・背景等が明らかになったからといって、全て受け入れて元の生活が送れるのだろうか。私なら、どんな形であれ家族を亡くしたら、とても元の私ではいられない。ましてや家族の死に「加害者」がいるのなら？想像するだけで恐ろしい。

犯罪被害者のその後を知るために、いくつか本を読んだ。その一つが、「犯罪被害者の声が聞こえますか？」(東大著作、二〇〇六年出版)である。そこには想像以上の被害があった。「たいへん」だと思っていたテレビ画面や新聞の向こうにいる被害者が受けた悲しみや苦しみは、凄惨だった。あまりに凄惨で、気持ちが沈み、休み休みにしか読めなかった。さらに、心身ともに傷を負った上に、治療費などがかさんだ場合、経済的にも苦しむことが分かった。名誉を傷つけられ、好奇の目にさらされることもある。被害者は、こうした二次被害とも呼べる苦痛にもおそわれるのである。

れ以上苦しむ被害者が増えないことを願う。

犯罪被害者に寄り添い、守ってくれるものはないのだろうか？本文の中に、いくつか法律や制度、支援団体が出てきたが、どれも知ろうとしなければ知ることができないように思えた。失意の中でそこに辿り着くのは簡単ではないだろう。犯罪被害者を救う様々な活動によって、改善されたもののまだ足りないように感じた。

犯罪被害者を知る学習を通して、大切なことは一人一人が犯罪を他人事と軽くとらえないことだと思った。犯人逮捕で終わってしまったが、被害者の無念や苦しみを知らなければならぬと感じた。一番は事件、事故を未然に防ぐこと。

通学路の横断歩道で見守りを続けている警察官のみなさん、青信号が点滅するやいなや止められるので、まだ行けたでしょ！とこっそり思っていてごめんなさい。悲しい事故を一つでも減らすためだと今なら分かる。命は、奪っても奪われても、苦しみしか生まれないのだから。私たちにできることは小さなルールを守ることだけかもしれないが、こ

## 自分の命を守るために

(滋賀県)

米原市立河南中学校 三年

北川 きたがわ

愛子 あいこ

ば、悲しいことは減っていくのではないかと思っています。

また、授業では、自分の命を大事にすることで、大切な人は幸せになるとも学びました。この言葉を聞いて、私が熱を出したり病気になったりすると、いつも家族が心配してくれることを思い出し、確かにそうだと納得しました。実際に、講師の方は自分の息子が事故に巻きこまれてしまったときのことを、「幸せだった日々が一瞬にして壊れてしまった」と表現していました。突然の事故や事件による家族や大切な人の死は、それまでの日常がガラリと変わってしまうことが伝わってきました。大切な人たちをこのような思いにさせないために、授業で聞いたことをふまえ、私は、自分の命を守る行動をとろうと心に決めました。自転車に乗るときは、ヘルメットをかぶり、交通ルールを厳守するなど、事故や事件に備えられることはたくさんあります。日常的に備えをしておく、小さなことでも命を守る行動につながっていくと思います。

「命の大切さを学ぶ教室」の授業を受けて私は、予期せぬ事故や事件に巻きこまれて亡くなってしまうた、たくさんの人の存在を知りました。被害にあわなければ、もつと長く生きることができるとは思いません。悲しい気持ちになります。そして、どうして被害にあつてしまったのか、そもそもなぜ事故や事件が起こってしまったのかという疑問も出てきました。私は、それら犯罪は一人一人が起ささないように意識しなければならぬと考えます。被害者の立場になって考え、個人で起こしてはならないという強い意思を持ってそれぞれ行動す

人は誰もが命を持ち、生きる権利を持っていて  
す。しかし、その大切な命が犯罪によって不平等に  
なくなってしまうことがあります。被害者や被害者  
の家族はその出来事によって幸せな日常が奪われて  
しまったのにもかかわらず、加害者の罪が軽いこと  
もあります。一度なくなってしまう命を、もと通  
りにすることはできません。失ってから後悔するの  
では遅いのです。なので、私達が加害者や被害者に  
ならないように、犯罪が起きてしまったときの、被  
害者とその家族が感じる「痛み」や「苦しみ」を想  
像し、理解することが大切です。一人一人が理解し  
た上で行動すると、きっと犯罪は減っていくと思い  
ます。事故や事件が起きない限り、命を失う被害者  
も、命を奪う加害者も生まれることはありません。

自分の命も、他人の命も、重さは皆、平等です。  
被害者を生まない、被害者にならないように命を守  
る行動をとるべきだと思います。私も、これから  
も、交通ルールを守り、自分の命を大切にしたいで  
す。

## 伊織さんが教えてくれたこと

(高知県)

高知市立天津中学校 三年

筒井<sup>つつい</sup>

琴香<sup>ことか</sup>

私は、今回の三浦さんのお話を聞き、改めて一つ一つの命の大切さ、生きることの大切さを知りました。私は三浦さんの「あなたの幸せは誰にも傷つける権利はない。でも、あなたが傷つけた人にもその幸せがあった。」という言葉が心に一番残っています。なぜかというところ、もし私の家族や友人が突然交通事故で亡くなったら、「もつと色々な幸せを見つけてらいたんじゃないか」「もし生きていたら、その分の幸せがあったのではないか」と思ってしまうからです。なので私は、その日一日一日ある命を生かし、飲酒運転のない未来を目指していきたいで

す。そんな未来をつくるために、まず私は自転車に乗るときはヘルメットを着用するなど自分のできることから変えていきたいと思いました。私は、事故のときに伊織さんが着用していたヘルメットの中の発泡スチロールがバキバキに割れているのを見て衝撃をうけました。そして改めてヘルメットを着用する大切さ、意味を知りました。また、自分がヘルメットを着用して終了ではなく、その大切さを家族や周りの人に伝えることによって、少しでも、自転車の事故で怪我をしたりする人や亡くなったりする人を減らすことが今、私にできることだと考えました。法律やルールは、沢山の人の命や権利を守るためにある。そして、それは皆が守ることで成立するということを三浦さんのお話を聞いて実感しました。まだ自分の周りに事故などが起きていないだけで、いつ何が起きるか誰にも分からないので、今日元気に生きて明日があることに感謝をし、今を精一杯生きていきたいと思いました。また、身の周りに事故などで悲しんでいる人がいたら、無理に言葉を

かけるのではなく、その人の話を聞きながら受け入れ理解をし、その人が少しでも前向きな考えができるように寄り添う心を忘れないようにしたいです。

三浦さんのお話の中で、心に残っている言葉がもう一つあります。それは「伊織の命を生かし、伊織と生きていく。」という言葉です。その言葉の先には、「加害者にも生きてほしい。」という三浦さんの思いがあり、もし私が三浦さんと同じ立場になったらと思うと、その思いはとてもすごいことだと感じました。「相手に変わってほしいは自分も苦しくなる。」という三浦さんの長い年月をかけて気づかれたお話から、私も相手を無理に変えようとするのではなく、自分の気持ちを変えられる努力ができる大人になりたいです。人は一人では生きていけない。伊織さんのお話を通して、命の大切さを教えてくださったことを忘れずこれからの人生を精一杯生きていきます。





# 【高校生の部】

## 命の大切さ

(兵庫県)

兵庫県立尼崎北高等学校 二年

鈴木村紗也すずむらさやの乃

「命を大切に。」この言葉には、今までいろんな場面であってきて、その度に命とはなにかや、その大切さについて考えてきました。その中でも特にそれを感じて心に残っているのは、昨年にあった、犯罪被害者の方の講演です。その講演では、集団暴行により命を落とした息子さんについて、ご遺族であるお母様がお話をしてくださいました。私と同じくらいの年齢である息子さんが集団暴行を受け亡くなったという出来事を聴いたときは、想像を超える暴行のひどさに震え、頭が空っぽになってしまう感覚がありました。暴行を受けた記憶が最後になるこ

と。そんなふうには死を迎えるのは、誰もが望まないことです。他人であり、その暴行を受けていない私に相当の恐怖を感じるようなことを息子さんは実際に受けたのかと思うと、本当に言葉が出ません。どれだけ苦しかったのだろうと想像してもしきれません。そして、苦しいのは息子さんだけでなく、ご遺族もです。講演では、「今も後悔や無力さが残っている。これはこれからも背負い続けていく。」と話されていて、その気持ちや計り知れない息子を失った悲しさがお母様を襲い続けているということがわかりました。また、「事件があつてから、私は『事件の人』となつてしまった」と話されていきました。私たちはその経験をしていないため、その名前がつくことの重さを完全に理解することは難しいですが、それでもよくその重みを感じました。講演中、何度か涙を流されていたため、お母様が抱えているものを強く感じ、被害者になつたらその事件の時だけでなく、一生その事実や辛さと向き合い、付き合っていかなければいけないだとよく分かりまし

た。

この講演で、私は新聞やニュースではわからない事件のことや被害者のこと、あまり語られない残された家族のことをたくさん知りました。そして、その事件が実際にあったという悲しさ、「被害者も、その家族も大きな苦しみを味わう」ということ、他人事ではなく自分ごとと思うべきだということ、命の重み、大切さを身に沁みて感じました。私はこれらの学びや感じたことをこれからの生活に生かしていきたいです。残された家族の皆さんの思いやそれを聞いて何を感じたかなどを私の中にしっかりと残し、それを人に繋いでいきます。事件の恐ろしさや、被害者の思いは、それを知る人に実際に聴いてみないと知ることはできないし、知らないで軽く受け止めたままになってしまふからです。それを避けるために私たちが繋いでいき、多くの人が命がどれだけ大切なものなのか理解することで、加害者にならない意識、被害者にならない意識が生まれ、悲しい事件が減ると考えます。それがきつと、被害者や

その家族が私たちに望んでいることの一つだと思えます。この講演ではご遺族であるお母様の辛く悲しい思いが非常に伝わってきました。その思いは、一生消えませんが、一つの命が失われれば、それはもうゲームのように復活することはないです。だから、それを理解し、ある命を大事に生きていかなければならないと思えました。「命を大切に。」私は被害者の方の思いを無駄にせず、この言葉をしっかりと胸に刻み生きていきたいです。それが、今の私にできることです。誰もが命の大切さ、ありがたみを胸にし、家族とご飯を食べられること、学校に安全に行けることなど、日常の幸せに気づき実感することが大事だと思えます。また、このような暴行事件から、人を傷つけることがどれだけ残酷なのかを学び、自分自身と周りを大切にすべきだということ、加害者になることの愚かさを理解することも必要だと考えます。そのような大事なことに多くの人々が気付いて少しずつ今より平和で笑顔が増える社会になってほしいと心から思います。

## 交通事故のない社会へ

(富山県)

富山県立高岡工芸高等学校 三年

中川なかがわ さくら

私は今回の「命の大切さを学ぶ教室」を受講するまで、交通事故についてここまで深く考えたことはありませんでした。私は大きな交通事故にあうことも、身近な人が巻き込まれることもないまま生きてきたからです。そんな私の考えは、「被害にあうのは特別な人ではない、いつ誰が何に巻き込まれるかわからない」という一言で間違っていたということに気づかされました。

高倉さんは「ルールを守る」、「反省することの大切さ」、「失われた命は戻らない」というこの三つは絶対に忘れないでほしいとおっしゃっていました

が、実体験の話聞いて、この言葉の重みをより深く感じる事ができました。当時の事故の様子を丁寧に細かく話してください、事故の生々しさ、その時の心境など、あまりにも突然訪れた事故の詳細が伝わってきました。高倉さんの「ルールを守っていたのに、いつも気をつけていたのに」という言葉に、私はとてもショックをうけました。冷静に淡々と話されている高倉さんを見て心が痛み、喉の奥から何かが込み上げてきました。当事者である高倉さんや家族のみなさんの苦しみ、悲しみ、怒りは本当に計り知れないものだと思います。また、加害者は飲酒運転をしており、過去に事故を起こした人だったにもかかわらず、懲役二年という軽い判決。そして出所してすぐに免許がとれるという結果には恐怖しありませんでした。高倉さん達家族の「もう二度とハンドルをにぎらないでほしい」というたった一つの願いも「仕事だからできない」と聞き入れてもらえず、こんな理不尽なことがあるのか、と強く思いました。

また、加害者に対する怒りや憎しみを直接ぶつけることができないので二次被害が起こることが多いということも知りました。長男は事故にあった時から二次被害が始まっていたそうです。想像するだけで辛く苦しくなりました。周りの人の心ない言葉、孤独感、加害者に対するどうしようもない怒りなど、被害者側はずっと忘れることのない苦しみの連鎖が起こり続けてしまいます。ニュースで報道される交通事故一件一件の裏側には、これほどまでの苦しみや痛み、憎しみがあるのだということを考えると、交通事故は本当に絶対あってはならないと思えました。

高倉さんが最初におっしゃっていた、「ルールを守る」、「反省することの大切さ」、「失われた命は戻らない」というのは最低限絶対に大切にしなければいけないことだと思います。当然「不慮の事故」というのもあるかもしれませんが、この三つを大切にすることで、人的事故は確実になくせると思います。また、もし万が一自分が事故を起こしてしまっ

たり、身近な人が事故にあってしまったりした場合には、被害者の心に寄りそい続ける、ということを必ず実行しなければいけません。被害者の気持ちや心情は当事者にしかわからないこともあると思います。しかし、その人の気持ちを想像し、理解しようとする努力、歩み寄る気持ちだけは決して軽んじないようにしようと思えました。今回の教室は、交通事故に対して深く考える大変貴重な機会になりました。自分が事故にあわなかったためにも、他の人を巻き込まないためにも、交通事故を他人事だと考えず高倉さんのお話を忘れないようにしたいと思います。

## 当たり前前を当たり前前にしない為に

(東京都)

東京都立園芸高等学校 二年 林 優花

「いつてきます」「おはよう」「またね」「おやすみ。」こんな何気ない一言に溢れた毎日を、私は家族や友達、先生といった沢山の大切な人に囲まれながら送っています。そんな日常を当たり前前に送れている私は、世界一の幸せ者なのかもしれません。

振り返ってみると、その一日の中で、「命」について考え、意識を向ける時間はあまりないような気がします。きっとそれは、私が生きているからこそ訪れる素晴らしい幸せな一日を「当たり前前だ。」と感じ、一日一日の重みを忘れてしまっているからでしょう。「私の大切な人が私の前からいなくなる。」

そんなこと、今まで考えたことすらありませんでした。

しかし、先日学校で行われた「命の大切さを学ぶ教室」でブレイキとアクセルを踏み間違えたトラックによって息子さんを亡くされた深迫祥子さんの話を聞いて、「当たり前」がどれだけ貴重で価値のあるものかを痛感し、これまでの自分を反省し、「当たり前前」とは何なのかと考えるようになりました。その息子さんはバリスタを目指し、世界大会で賞をとり、自分のカフェを作り、結婚して幸せな家庭を築く、そんな夢に向かって突き進んでいく方だったそうです。深迫さんは「息子が亡くなったと連絡が来た時は、頭が真っ白になった。」「まさか自分の息子が事故に巻き込まれるなんて思ってもいなかった。」「もう少し会っておけば良かった。」と最愛の息子を失った悲しみを私たちに語ってくれました。私はこのとき、今まで病気もせず健康に毎日を過ごしてきた人の命を一瞬で奪ってしまう、被害者の方だけでなく、被害者のご家族の心に深い傷を残し、

人生を壊してしまう交通事故の恐ろしさを改めて感じました。もし、自分にとって大切な誰かが交通事故に巻き込まれてしまったら。もし、自分が交通事故の被害者、加害者になってしまったら。私の前の、そして今の日常は一変してしまいます。深迫さんのお話を聞いて、今ある日常が沢山の奇跡によって作られていることを実感しました。

以前、私はこのような言葉を聞いたことがあります。「あなたが何気なく生きた今日は、どんなに生きてくても生きられなかった人がいる。」という言葉です。被害者の方のお話を聞いているとき、この言葉がふと脳裏に浮かびました。毎日を健康に生きていると、つい忘れがちになる「当たり前は素晴らしい。」「生きていることは奇跡という事実。」「明日がやってくることは必然じゃない。」という意識。そして、「自分が相手、相手の家族の当たり前を奪ってしまおう。」という危機感。この三つは絶対に忘れてはいけない、周りの人に伝えなくてははいけない、そう心に決めました。

私は今も「当たり前を当たり前にしないうすれば良いのだろうか。」と考えています。誰かが生きてくても生きられなかった今日を無駄にしないうすれば良いのです。私は「当たり前だと感じられること自体がとても幸せなこと」なのだと思えます。だからこそ、その幸せを「当たり前だ。」と感じないことが、「当たり前を当たり前にしないうすれば良い」に必要不可欠だと私は考えます。だから私は一日一日を「当たり前のように日常を送れていること」や、「いつも支えてくれる大切な人への感謝」を忘れずに一生懸命生きています。それが今、私の中の幸せを当たり前にしないうすれば良いに、そして「命」を大切に、その大切さを忘れない為に出来る精一杯の事です。自分だけでなく、周りの人も大切にしながら、私は今日も明日も生き続けます。



## 伝えること

(新潟県)

新潟県立新潟高等学校 二年 米山明日花

夏休み前学校で「命の大切さを学ぶ教室」が開かれ、私も一生徒として参加した。今回来てくださいの方は、交通事故に遭われた女性だった。原稿用紙に書かれた壮絶な内容は、私たちを驚かせた。

二〇〇一年のある日、突然にして日常は消え去った。四人家族の長男を塾に迎えに行く途中、法定速度を大幅に超えた対向車が走ってきた。対向車はハンドル操作を誤り、家族の乗る車と正面からぶつかった。山道だったこともあり救助隊の到着が遅れ、家族三人はバラバラの病院に搬送された。事故を知った長男は、父のいる病院に駆けつけた。しか

し医者から告げられたのは「これからお父さんの人工呼吸器を外します。いいですか？」という言葉だった。母は事故前後の記憶を失い、次男も重症で大好きなスポーツをあきらめた。心理的に不安定で事実を伝えることができず父の葬式には出られなかったそうだ。また、半年ほど病院に通った二人に対し、加害者はたった一ヶ月で退院したという。それでもしばらく謝罪には来ず、のうのうと生きていた加害者への怒りも語ってくれた。もちろん刑事事件として裁判を行ったが、謝罪は弁護士と共にたった一度だけ。謝罪を求めているわけでもないが、もちろん謝罪なしで許せるはずもない。「刑期が終わったことで、償いも終わったと思っっているのでしょうか。」彼女の言葉が鋭く響いた。

その通りだと思った。罰は多くの場合、罪の大きさに比例する。人をたくさん残虐に殺したら無期懲役か死刑か、軽い罰ではないだろう。しかし逆に、被害が小さいから罰が軽くていいのだろうか。罰を課すことの目的は、反省し改心することにあると思

う。たとえ交通ノ事故ノだったとしてもだ。しかし、この事故の加害者は深く反省することなく刑期を終え、社会に普通に復帰している。罪と罰が釣り合っていないのだ。罰、刑期という時間を通して、自分のしたことに對ししっかりと向き合うこと。もちろん失ったものは元にはもどらないが、それが被害者に對する最短かつ最善の償いだと感じた。

講演会後に一番印象に残ったことは、伝えてくださったことに対する感謝だった。繰り返すが、この事故からは約二〇年が経っている。それでも講演中、被害者の方が涙を流す場面があった。また最初、彼女が原稿を抑揚のない声で読み上げていることに私は不信感を抱いた。しかし話を聞くうち、「変に想像してしまい感情的にならないよう」読むことしかできないのではないかと考えた。それだけ辛い経験であり、本当は思い出さたくないのかもしれない。だからこそ、私たちに語ってくださったことに感謝を申し上げたい。この講演会がなければ、私の心がこんなに動かされることも、命について深

く考えることもなかったと思う。経験を語ることは、必ずしも楽しいことではない。でもこの講演会のおかげで、未来の事件や事故、辛い思いをする人が確実に減ったと思う。

人間は時に人を傷つけ、傷ついてしまうものだ。事件事故はもちろん、言葉も人を傷つける。言葉に對しどのように行動し、どのように考えるかは人の個性だ。だから被害者をゼロにするというのは不可能に近いと思う。しかし、減らすことはできる。そのため、この命の大切さを伝える活動をつづけることがまず重要だと思う。かつて日本には戦争があったが、時代が進み今語ってくれる人は少ない。對して交通事故や事件は、残念だがずっと起き続けている。逆にいえば語ってくれる人はいるのだ。もちろん今回のように本人にとっては辛いと思うが、伝えるということは大切だと思う。子供は単純に生きてきた年数が少ない。共有することで変わる意識が、たくさんあると思う。

講師の方が最後に、四つ心がけて欲しいことを伝

えてくださった。命を大切にすること、互いに尊重し認め合うこと、交通ルールを守ること、家族で交通安全の話をする事。

まずは私から、この講演会で学んだことを伝えてみた次第である。

## あたりまえではない “今”

(島根県)

島根県立出雲高等学校 三年 安食あじき 優良ゆうら

私は中学生の時も「命の大切さを学ぶ教室」の講演を聴いたことがありますが、数年経ち今回の講演を聴いて、改めて命の重みやあたりまえはあたりまえではないことを感じました。江角さんのお話や当時のニュース映像を聴き、大切な人を突然理不尽に失うことは、私たちには想像できないくらいつらく苦しいことだと思いました。私がいもしい大切な家族や友人の命を理不尽に奪われたら、絶望して立ち直れないかもしれません。しかし、江角さんはこのような講演を続けておられ、理不尽に命を奪われてしまった方々の思いを伝え続けていて、信念を感じました。

真理子さんをはじめ三人の尊い命が奪われた事件について話を聴いて印象に残っているのは、「三人の命だけ奪ったわけではない」という言葉です。お三方はまだ二十歳という若さで命を奪われました。まだまだやりたいことがたくさんあったと思います。なのに、飲酒運転の車に衝突され、その願いが断たれてしまった。自分の夢を仕事にしたり、結婚して家庭をもったり、子どもを育てたりすることができなかつた。この苦しみを言い表す言葉が見つかりません。「三人の命が奪われたということは今後生まれてくるかもしれない子どもたちの命をも奪ったということだ」というお言葉から命の重み、尊さを改めて感じました。それなのに、加害者はたった数年の懲役で、再び人生を歩んでいく。こんなことが許されていいのか、と思いました。命よりも大切なものはないと思うので、その尊い命を奪った加害者たちはどんな理由があろうと許されてはいけないと思いました。

今生きていることは、あたりまえではない、とい

うことは私も日々感じています。私は持病の再発が悪化し、一時心肺停止となり、生死をさまよった経験があります。その時私は病院に入院していたのですぐに治療を受けることができ、生き延びることができました。しかし、交通事故はいつ、どこで遭うのか分からないので、高度な治療をすぐにうけることができません。私は心肺停止となる一日、二日前に入院していたので助かりましたが、それよりも後に入院していたら、私は助かっていないでしょう。今回の講演も聴くことができなかったでしょう。だから、今、生きていて毎日学校に通ったり、ご飯を食べたり、大切な人たちと話したりできることはあたりまえではない、奇跡であるということはよく分かります。しかし、今回のお話を通してその思いがよりいっそう強くなりました。勉強や人間関係、家庭環境など悩むことは尽きないけど、それでも生きて、辛かったり苦しかったりしたら助けを求めて、生かされたこの命を大切に、精いっぱい生きたいと思いました。

私たち高校生の一番身近にある事件は交通事故やいじめだと思えます。私たちの移動手段の一つに自転車があります。自転車同士、自転車と車、自転車と歩行者など自転車に乗っていると自分が加害者にも被害者にもなってしまう可能性があります。今以上に気をつけて運転したいと思えました。そして、いじめは自殺につながる可能性があります。幸い、私の周りではいじめは起きていませんが、いつでも起きるか分からないので、いじめを止めることのできる人間になりたいと思います。

命あるものには限りがあり、私たちもいつか死んでしまいます。しかし、その「いつか」が、明日になるかもしれないし、もっと先かもしれない。自分じゃなくて、家族や友達かもしれない。そのことを忘れず「今」という時間を大切にして生きていきたいと思えます。

今回は「命の大切さを学ぶ教室」を開催し、私たちに講演をしてくださって、本当にありがとうございます。

